様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３４５３５
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2015～2016
課題番号：１５Ｈ０６７８２

研究課題名（和文）教育実践をめぐる関係性の動態的記述と教育実践リフレクションモデルの構築

研究課題名（英文）Describing Relationships in Educational Practice and Constructing Reflection-Model on Educational Practice

研究代表者
國崎　大恩（KUNISAKI, TAION）

神戸常盤大学・教育学部こども教育学科・講師

研究者番号：９０７５６３１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：　教育実践とその振り返りが循環的・相補的関係性にあること、また教育実践を取りまく諸関係の雑多性の中から教育という領野が切り開かれていくことが明らかとなった。その結果、教師たちによる教育実践の振り返りを、すでに行われた実践に意味を与える行為としてではなく、教育とは異なる様々な関係性をも取り込みながら「新たな教育実践」を生み出していく過程として記述することができるようになった。
　また、記述を媒介としながら教育実践とその振り返りを入れ子状的関係性におくことにより教師の専門性を高めていくことができるとして、そのための具体的ツールとして「教育実践リフレクションモデル」を構築した。

研究成果の概要（英文）：This study clarified the following two points. (1)Educational practice and its reflection are in cyclical and complementary relationship. (2)Education will be opened up from miscellaneous relationships surrounding educational practice. As a result, I described teacher's reflection on their practices as not a behavior giving a meaning to already practiced practice but a process creating "new educational practice" incorporating miscellaneous relationships.
Also, by placing educational practice and its reflection in a nested relationship through describing practice and reflection, teachers can enhance their own competence. So, in this study, "Reflection-Model on Educational Practice" was constructed by applying these findings.

研究分野：教育学

キーワード：教育学　教師教育

１．研究開始当初の背景

日本の教師文化のなかで脈々と続いてきた授業研究は 1990 年代後半からレッスンスタディ（Lesson Study）として海外から着目されはじめ、現在では 20 カ国以上の国の教師たちによって多様に展開され、また授業研究を研究対象とする研究も国際的ネットワークの中で行われている。しかし、ウルフと秋田が「レッスンスタディの大きな特徴は、その国の文化や学校文化に埋め込まれた学習システムとして成立するものである」（ジーン・ウルフ／秋田喜代美「レッスンスタディの国際的動向と授業研究への問い」秋田喜代美／キャサリン・ルイス編『授業の研究教師の学習』明石書店、2008 年、34 頁）と述べているように、授業研究を研究対象とする場合、各々の授業研究が有するその土着性についても射程に入れたアプローチが必要となってくる。

他方、研究代表者である國崎はこれまでアメリカやフィンランドの教師教育について研究する中で、教師たちによる教育実践の振り返りがそれを枠づけるはずの各々の教師教育制度や体系をも変容させながら行われていることを明らかにしてきた（「学生の振り返りを支援する教員養成スタンダードの運用に関する一考察」(『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』第 24 巻、2015 年)、「フィンランドの教師教育とその構造－〈教育学的思考〉とカリキュラムの相同性」(『兵庫教育大学研究紀要』第 44 号、2014 年))。これらの研究は振り返り行為とそれに直接影響を及ぼす制度や体系との関係性のみに焦点を当てるものであり、教師をとりまく文化的・社会的関係性にまで考察の範囲を広げたものではない。しかし、教師たちによる教育実践の振り返りはその制度や体系だけでなく、教師個人をとりまく関係性、すなわち学級での関係性・職場での関係性・家庭での関係性・地域での関係性など多様な関係性のもとで行われるものであろう。であるならば、教師たちによる実践の振り返りは教師教育制度や体系だけでなく、土着的とも呼べる教師個人をとりまく多様な関係性をも変容させながら行われるのではないだろうか。

以上のような問いのもと、授業研究において行われる教師たちによる教育実践の振り返りを対象に、学校内外の多様な関係性が教育実践のもとでいかに関係づけられ、その関係づけによって教師個人や学級・学校がいかに変容していくのかを明らかにしていく必要があると考え本研究をスタートさせた。その際、教育的言説や教育的営為の影響により多様な関係性がまとめ上げられていくという過程に分析の視点を置くのではなく、社会的言説や科学的営為などにより人やモノが複雑に絡み合った雑多な諸関係が教育実践という「合理性」のもとに関係づけられていく過程に分析の視点を置くことは、本研究の独自性としてあげられる点である。それはたとえば、授業研究に取り組む学校全体の記述によって教師がどのような実践記録を作り、それがまた生徒の学習に対する教師の眼差しをいかに変えているのかを明らかにしようとするエスノグラフィー的アプローチ（例えば、大瀬敏昭・佐藤学『学校を変える』小学館、2003 年）や、授業研究の実践で生じる社会的やりとりが教師の学習にどのような影響を与え、また個々人の学習がその文化や社会的関与をいかに高めていくのかを問う社会文化的アプローチ（例えば、Fernandez, C., Cannon, J., & Chokshi, S., “A U.S.-Japan lesson study collaboration reveals critical lenses for examining practice” Teaching and Teacher Education, 19(2), 2003, pp.171-185）とは異なって、授業研究という営みにおける関係性の生成や教師の実践の輻輳性に注目した授業研究への新たなアプローチにむけた試みとして位置づけることが可能である。

２．研究の目的

本研究の目的は、授業研究において行われる教師たちによる教育実践の振り返りに着目し、関係論的視点から、その有り様を明らかにすることにある。具体的には、関係論的視点からフィールドを記述する人類学の知見を参照することによって教育実践をめぐる関係性の動態的記述について理論的に確立し（下記(1)参照）、さらにそれを用いて教師による教育実践の振り返りを記述することを通して、人やモノが複雑に絡み合った雑多な諸関係が教育実践という「合理性」のもとで相互に関連づけられていく様子とそれによる教師や学級・学校の変容の過程を分析していくこと（下記(2)参照）を目的として研究を開始した。

(1) 教育実践をめぐる関係性の動態的記述にむけた基礎研究

教師たちによる教育実践の振り返りを分析するための方法論を理論的に構築するため、エドワルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロらによる「人類学の静かな革命」と呼ばれる諸研究を参照する。それらの研究は、実在が所与ではなく特定の関係を通じて構築されることを解明すべく、徹底して関係論的な認識のもとで様々なフィールドを記述していく。そうした方法論の最大の利点は、超越的な観点を排除することによって、人やモノが相互に影響を及ぼしながら齟齬と連接を生み出し、集合や分離を次々と形成することでさらなる齟齬と連接を作り出していく過程を記述することができることにある（Viveiros de Castro, E., ”Intensive Filiation and Demonic Aliance” Jensen, C. B., Rödje K., (eds.), Deleuzian Intersections, Berghahn Book, 2010, pp.219-254）。したがって本研究は、これらの諸研究を参照することによって、教師たち自身による教育実践の

振り返りにおいて雑多な諸関係が教育実践のもとで関係づけられ、さらにそのことによって新たな実践の可能性が切り開かれていくというダイナミズムを描き出す方法論（「教育実践をめぐる関係性の動態的記述」）を理論的に構築することを第１の研究課題とする。

⑵ 教育実践をめぐる関係性の動態的記述による教師の振り返りの記述・分析

理論的に構築された方法論を用いて実際の教師による教育実践の振り返りを記述・分析することによって、学校内外の多様な関係性が教育実践の振り返りにおいて教育実践という「合理性」のもとでどのように一連のものとして関連づけられ、またそれによる教師や学級・学校の変容過程を明らかにすることを第２の研究課題とする。

以上２つの研究課題に取り組むことによって、教師たちによる教育実践の振り返りが何かを表象したり考察したりする取り組みではなく、相互作用を通じて教育という営みを創り上げていく取り組みであることを明らかにするとともに、教育実践の動態的記述という方法論を「教育実践リフレクションモデル」として示すことによって教師の専門性を高めるための具体的ツールを構築することを本研究の最終的な目的とした。

３．研究の方法

(1) 教育実践をめぐる関係性の動態的記述にむけた理論的基盤の構築

まず、「人類学の静かな革命」と呼ばれる一連の研究がポストモダン人類学の課題をいかに乗り越え、どのような記述・分析によって何が可能となったのか、その方法論の特徴を明らかにする。具体的には、「人類学の静かな革命」に影響を受けた最新の研究動向にもふれつつ、その核心となる関係論的な視点による記述・分析についてヴィヴェイロス・デ・カストロらの著作を取り上げながら考察を行う。

次に、「人類学の静かな革命」における関係論的な視点にたった方法論を授業研究へのアプローチとして具体的にどのように適応できるのかを考察し、教育実践をめぐる関係性の動態的記述にむけた理論的基盤を構築する。その際、授業研究に対する従来の学術的アプローチと比較しつつ、それらの布置に本研究を位置づけることによって、その特徴も明らかにする。

(2) 教育実践の振り返りに関する記述・分析

日本とアメリカにおいて教師たちの授業研究と教育実践の振り返りに関するフィールドワークを行うことによって、人やモノが複雑に絡み合った雑多な諸関係が教育実践という「合理性」のもとで相互に関連づけられていく様子とそれによる教師や学級・学校の変容の過程を分析する。とりわけ、アメリカ・ニューヨークにあるバンクストリート教育大学院の研究者と協力しつつ、授業の振り返りのあり方に関する日米の国際比較を行うことを通して、教育実践の振り返りという行為に教師個人をとりまく教育以外の多様な関係性がそこに流入するのかについて明らかにする。

(3) 教育実践リフレクションモデルの構築

教育実践をめぐる関係性の動態的記述を「教育実践リフレクションモデル」としてツール化する。また、実際に教師たちに試用してもらうことによって、その利便性とともに方法論そのものの課題を明らかにする。そして、その改善を行うことによって、教員が自らの力量を高めるために利用できる「教育実践リフレクションモデル」を構築する。

４．研究成果

(1) 教育実践をめぐる関係性の動態的記述

教師の教育実践とその振り返りは、相互に「記号－意味」の関係性をつくりながら、そのズレの中で雑多なモノゴトを取り込みつつ「教育実践」という営みをつくりあげていることが明らかとなった。すなわち、授業の場面においてはそれまでの振り返りが記号となりつつ授業実践がそこに意味を与えていること、翻って、リフレクションの場面では授業実践が記号となりつつその振り返りがそこに意味を与えていることが明らかとなった。そして、その記号と意味の連鎖の中に生じるズレが他者から指摘されるなどして意識化される時、そこに教育実践とは異なる関係性を入れ込みながら「新たな教育実践」を教師が生み出していく様を明らかにすることができた。

こうした新たな教育実践を生み出していく営みを可視化するのが「記述」である。すなわち、ズレを含む歪な円環を構成しているある教師の教育実践と振り返りが記述されることにより、そこに「新たな教育実践」としての「合理性」が形成されることが明らかになったのである。換言するならば、記述を媒介としつつ、実践と振り返りが入れ子状的関係性を形成することによって雑多な諸関係が教育的合理性の名の下で整理され、「新たな教育実践」という可能性が切り開かれていくということである。

(2) 教育実践をめぐる関係性の動態的記述の意義

教育実践をめぐる関係性を、記述を媒介とした実践と振り返りの入れ子状的関係性として記述することは、次の二つの意義を有していると考えられる。

①教育実践の振り返りの新たな記述可能性

これまで教師による教育実践の振り返りは、往々にして超越的な視点から第三者的に記述・分析されてきた。こうした記述・分析は

確かに一定の客観性を担保することができるが、他方で教師が行う教育実践とはやや解離したものとなる傾向が強かった。一方、本研究が明らかにした教育実践をめぐる関係性の動態的記述は、超越的な視座や定点を排除し、関係論的な認識のもとで教師による教育実践の振り返りを記述・分析することを可能にする。そのことによって、従来は考察されてこなかった諸関係をも教育実践を構成する重要な要素となり得ることを示すことができ、そうした教育実践をめぐる諸関係の雑多性の中から教育という領野が切り開かれていくことを他でもなく教師自身の実践において見ていくことが可能になる。

②教育実践の振り返りの捉え直し

これまで教育実践とその振り返りの関係性は、まず実践があり、それを反省する行為として振り返りが存在するという一対の関係性として捉えられてきた。しかし、本研究によって明らかとなった教育実践と振り返りの関係性は、その循環的・相補的関係性であり、さらにそこには構造的にズレが孕まれるということであった。そこから、教育実践の振り返りを、実践に対して静的に存在するものとしてではなく、実践に対してつねに動的に存在するものとして捉え直すことが可能となる。またその捉え直しにより、実践と振り返りが一致することなくズレるということを、新たな教育的合理性が立ち上がってくる契機として捉えることができるようになる。

(3) 全国学力・学習状況調査をめぐる教師の教育実践とその振り返り

毎年実施されている全国学力・学習状況調査は、教師にとって二重のエビデンスの役割を果たしている。すなわち、一方でそれは説明責任としてのエビデンスという役割を果たし、他方で応答責任としてのエビデンスという役割を果たしている。しかし、前者においては、教師が日々の自らの実践を改変するという応答責任を通してのみしか教育実践に関係できないという意味で限界をもっている。また、後者においては、子どもの学習の経験はつねにすでに教師の意図とはズレていくが故に、「学力調査」を通していくら教師が子どもの課題を「適切」に把握し教育を行おうとしても、それとは別に子どもの学習は生じてしまう。したがって、応答責任においてであろうと説明責任においてであろうと、エビデンスとしての「学力調査」と教師の教育実践との間には必然的にズレが生じることになる。

したがって、教師の教育実践は「学力調査」というエビデンスに確実な支えを見出すことができない。しかしそれは、「真の」教育実践においてエビデンスは必要ないということを意味しているのではない。むしろエビデンスは教師が自らの応答責任を果たす上で必要不可欠である。その意味するところは、教育実践がエビデンスのどこにも確実な支えを見出すことができないということが、子どもの学習という謎めいた行為を扱う教育実践の不可避的構造であるということである。より正確に言うならば、エビデンスのどこにも確実な支えを見出すことができないからこそ、教育実践は子どもの学習を導くことができるということである。

こうした教育の構造的条件に目をむけるとき、教育実践の振り返りはまた新たな意味をもちはじめることになるだろう。教育実践の振り返りとは自らの教育実践の支えを見出す活動ではない。それは教師の自由が試される場と言えるのである。

(4) PISA 調査をめぐる教師の教育実践とその振り返り

PISA 調査を契機に、教室という空間はグローバルなものとローカルなものがせめぎ合う場となった。教師はそこで、一方で国際比較による教育の一元化の力を受けながら、他方で国際比較からはすり抜けてしまったものを拾い上げる作業をしていかなければならない。

したがって、PISA がその効力を発揮するためには、教師一人一人の日々の実践が目の前の子どもにむけて多様に開かれていなければならないのである。すなわち、何を内容的知識として教えるべきか、それによってどのような世界に子どもたちを参加させていくのかという観点から自らの教育実践を振り返ることは、逆説的ながら、PISA 調査にリアリティを与える条件でもあると言えるのだ。

(5) デューイ思想における記述と解釈の関係性

文献調査を進めていく過程で、アメリカの哲学者であるジョン・デューイの思想から記述と解釈の関係性をめぐる新たな着想を得ることができた。それは以下のようなものである。

1896 年に発表された「心理学における反射弧の概念」において、デューイは反射弧の概念を心理学における新たな包括的説明原理とすべく、「調整」という概念のもとでそれを再構築することを目指した。そのために彼が用いた方法は二つの具体例を考察する中でその概念内容を論じていくというものであった。まず初めに、彼は子供とローソクの例を分析する中で、反射弧を見るという活動を基点とした感覚―運動調整という全体性の維持・再構築としてとらえ、多様な動きが媒介するなかで活動の質が維持・修正・変容されていくことを明らかにした。その後、彼は大きな物音から逃げる例を分析する中で、活動の質の意味は遡及的・事後的に特定されるものであり、感覚―運動調整という全体が維持・再構築されるただ中においてはその意味を特定することができないと述べる。以上

のような見ることと聞くことの分析を通して、デューイは現象の記述とその解釈を異なるものとして位置付ける新たな理論的地平を切り開いていくのである。そしてその意義は、科学的解釈には主観性を排除することができないこと、すなわち目的という人為的な意識が入り込むことによってはじめて科学的解釈は可能になるということを主張可能にすることにあった。

以上のように、従来の枠組みではとらえきれない事実に直面したとき、デューイは二つの視点を交錯させるなかでその事実がもつ意味を留保させ、意味の不在のただ中において思考を運動させることによって新たな理論的地平を切り開いていくのである。こうした視点の不在による意味の不在という契機は、デューイの思想を現代において語りなおす新たな視点となるだけでなく、記述と解釈の関係性を捉え直す新たな契機となるはずである。

(6) 子どもの活動をめぐる記号と意味の関係性について

幼稚園の先生方による保育実践の振り返りについて研究を行っていた際、子どもの活動における以下のようなダイナミズムが明らかとなった。

語ることの限界にありながらその前提でもある幼児は、言語を記号論的なものと意味論的なものに分割することによって象徴的思考を可能とする。そして象徴的思考によって、幼児は世界を再編成しつつ未知のものを既知のものへと変えていく。したがって、「環境」と「言葉」の関連とは、たんに子どもが感じたり考えたりしたことを言葉に表現し、身の回りにあるモノや事象の理解を深めていくことではない。そこでは子どもが言語を二つの側面へと分割し、象徴的思考において全体を再構成しながら言葉を紡ぎ出し、身の回りにあるモノや事象を含めた世界全体を再編成することによってそれらを未知のものから既知のものへと変えていく。そしてこうした過程が「理解」であると言える。すなわち、理解とは何かをありのままに捉えるということではなく、世界全体をアレンジしながら事物を形作っていくということなのではないだろうか。子どもの活動とはまさにこうした「理解」を生み出していくダイナミックな活動なのである。

(7) リフレクションモデルの構築と今後の課題

教育実践をめぐる関係性の動態的記述をもとに、教員が自らの力量を高めるために利用できる「教育実践リフレクションモデル」を構築した。

また、日本とアメリカの両国において、教師の振り返りツールとして試用した。その結果、教師自らが自分の教育実践に関して新たな発見をしやすくなったという意見が聞かれた一方、教育実践の「改善」にむけて利用することには難があるという意見もあった。今後はこの試用から明らかになった課題をふまえ「教育実践リフレクションモデル」をさらに改善し、多くの教員が利用しやすくなるモデルの構築を目指したいと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 4 件）

① 國崎大恩、経験を記述すること解釈することの分離－あるいは、プラグマティズムの可能性－、日本デューイ学会第 60 回研究大会、2016 年 9 月 25 日、岐阜大学（岐阜県）

② 國崎大恩、学生の主体的な学びを中心とした新たな保育士養成のあり方について、全国保育士養成協議会第 55 回研究大会、2016 年 8 月 26 日、いわて県民情報交流センター（岩手県）

③ 國崎大恩、「保育」概念のゆらぎと保育士の実践、全国保育士養成協議会第 54 回研究大会、2015 年 9 月 23 日、ロイトン札幌（北海道）

④ 國崎大恩 他、授業研究の学際的解釈と再構築、日本教育心理学会第 57 回総会、朱鷺メッセ（新潟）

〔図書〕（計 3 件）

① 國崎大恩 他、北樹出版、子どもと教育の未来を考えるⅡ、2017

② 國崎大恩 他、昭和堂、教育のイデア、2017

③ 國崎大恩 他、あいり出版、学びを創る教育評価、2017、143－176

６．研究組織

(1)研究代表者

國崎　大恩（KUNISAKI, Taion）
神戸常盤大学・教育学部・講師
研究者番号：90756313